

財団法人
日本性教育協会
THE JAPANESE
ASSOCIATION FOR
SEX EDUCATION

現代性教育研究月報

○ホームページ <http://www.jase.or.jp> ○e-mailアドレス info@jase.or.jp

現代性教育研究月報第26巻第11号(通巻305号) 2008年11月15日(毎月15日)発行 昭和62年12月1日第三種郵便物認可 定価1部150円 年間購読料1800円(送料共) 発行所(財)日本性教育協会 〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 発行人 松本清一 編集人 金子成男

も	女性向けポルノコミックにみる女子の性と	美亜のそれゆけセクソロジー!④	13
く	セクシュアリティ	安藤由紀のヒューマンライツ・DIARY®	14
じ	JASE新評議員に聞く(2)	JASEジャーナル	15

女性向けポルノコミックにみる 女子の性とセクシュアリティ

関西大学社会学部専任講師 守 如子

1. はじめに

日本性教育協会が6年ごとに行っている『青少年の性行動全国調査』から、男女の性のあり方に関する興味深い現状がみえてくる。女子の性交経験率の急激な増加を示すものとして話題になる「学校別性交経験率」のグラフについていえば、2005年のデータをよくみると、大学女子の経験率は大学男子と並んだだけであることがわかる。かつて、男性は性行為に関してアクティブであっても容認される傾向があったのに対し、女性に対し

ては純潔を強調するような、男女で異なる性の規範が存在していた。確かに性行為経験率は上昇傾向にあるが、2005年の注目すべき変化は、性のダブルスタンダードが消えたことにある。

ところが、同じ調査の質問項目である「あなたは自慰(マスターベーション、オナニー)の経験がありますか?」に対しては、いまだ明らかなダブルスタンダードがみられる。この質問に「ある」と答えた大学生は、男子94.4%に対し女子45.9%、高校生に至っては男子79.8%に対して女子13.7%と男女に明らかな違いがみられる。性行為については消えつつあるダブルスタンダードは、マスターベーションにおいてはいまだ健在なのである。

私自身の経験を紹介することをお許しただけだろうか。私は子どもの頃からマスターベーションを習慣的に行っていたが、してはいけないことだと悩んでもいた。「マスターベーションすると頭が悪くなる」という古臭い「神話」も恐れていたが、それだけではなく、「私は女なのに、こんなことをしていいのだろうか、変態なんじゃないか」と思っていたのだ。性教育に関するどんな本を見ても、マスターベーションする主体はいつも男性であり、議論から女性は抜け落ちていた。この悩みが消えたのは、大学に入ってフェミニズムやセクシュアリティを学んでからのことである。例えば『からだノート』（中山千夏著、ダイヤモンド社、1977）は、女性たちが普通のこととして自らのマスターベーション体験を語る姿を描いており、「ああ、女でもしていいんだ」とほっとした記憶がある。

その頃出会った男性の友人に、「自分はマスターベーションをしたいと思ったことがない。だけど、アダルトビデオの貸し借りをすることが高校時代の友達同士のコミュニケーションだったから、しょうがなく加わっていた」という人がいた。そのとき、性に関する〈男子がするもの、女子はしないもの〉というイメージに私たちが取り囲まれていることを強く感じたものである。

悩みから抜け出したもう一つの原因は、女性向けポルノグラフィの存在である。90年代に初めて女性向けポルノグラフィが商業的に出版されるようになった。その存在をフェミニズムの本で知った私は、急いで買いに走った。女性向けポルノグラフィは、同時代のたくさんの女性がそれを買って、マスターベーションをしているということを私に実感させた。

こうした経験から、女性のセクシュアリティを考える場合にも、単に、「生殖」や「恋愛」で終わるのではなく、いままで語られることのなかった性的欲望も視野に入れなければいけないと思うに至ったわけである。本報告では、女性が自ら主体的に楽しんでいる女性ポルノグラフィという素材をとりあげ、性的欲望をめぐる状況にせまりたい。

2. 女性向けポルノグラフィとは何か

「ポルノグラフィ」は、多様な意味で使われる言葉である。(1) 性表現を取り締まろうとする立場からは「法的規制の対象」を指す言葉として、(2) フェミニズムの文脈では「性差別的な性表現」として、(3) 日常生活の文脈では、アダルトビデオやポルノコミック、官能小説…などの「マスターベーションのための性表現」として定義されることもある。

ここでは、規制すべきか否か、性差別的か否かの判断は保留し、現状のセクシュアリティのあり方を明らかにするために、(3)の意味における「女性向けポルノグラフィ（以下略して女性向けポルノ）」を見ていこう。

女性向けポルノは、マンガという形式で成立している。女性向けポルノコミックには、フィールドの違う二つのジャンルがみられる。

「レディコミ」と「ボーイズラブ（略して、BL）」と呼ばれるもの（の一部）がそれである。「レディコミ」とは、1990年頃に大人の女性向けマンガの中から分化する形で生み出された、初の商業的女性向けポルノコミックのジャンルである。他方、「BL」とは、1970年代から同人誌文化の中に存在していた「やおい（＝女性向けの男性同性愛表現）」から発展し、1990年代後半に商業誌になったジャンルである。「BL」の一部がポルノコミックとして存在している（以下「ハードなBL」と呼ぶ）。

男性向けポルノコミックとは異なる、女性向けポルノコミックの特徴として、ジャンルの見分けがつきにくいことを指摘することができる。「レディコミ」誌は、女性たちの家庭や仕事や人間関係などをめぐる物語を描く「女性マンガ」の一部の雑誌であるし、「ハードなBL」誌は、純愛を描く「BL」ジャンルの一部の雑誌である。そして、その雑誌がポルノなのか、そうでないのかは、ジャ

ンルに詳しくない人にはよくわからない構造になっている。男性向けポルノならば、表紙に女性の性的な姿態を描く、といったように、表紙を見ただけでポルノであることがわかる。しかし、女性向けポルノコミック誌は表紙にそのようなあからさまな表現を使わない。

もちろん、ポルノグラフィを買うことは、男性にとっても恥ずかしく気まずい思いをする行為であるだろう。だが、女性たちにとっては、それだけの問題ではない。ポルノグラフィを女性が買うことは、性のダブルスタンダードを侵犯するがゆえに、男性以上に批判される可能性がある。また、女性自身が性的好奇心の対象物にされ、性被害に直面することさえありうる。だから、女性たちにとっては、ポルノコミックを買っていることが明らかになってはならないのである。このため、女性向けポルノは、あるジャンルの中に隠れるようにしてのみ存在しているし、表紙もまた一見ただけではわからないようなつくりになっているわけだ。

3. 女性向けポルノコミックの読者分析

女性向けポルノには誤解も多い。例えば、「女性は文章でイメージーションをかきたてることはあっても、ビジュアルには反応しない」という見解がある。しかし、マンガという視覚的表現で女性向けポルノが成立していることに照らし合わせるならば、それは間違いであることは明らかである。

また、女性向けポルノコミックの研究をしていると、周りの人たちから「ほんとは男性が読者なんじゃない?」「だれがこんなもの読むの?」などという反応をされることも多い。このような反応の裏には、男性にしか性的欲望はないとする性のダブルスタンダードだけでなく、女性を性的に無垢な「私たち一般人」と性的にアクティブな女性に二分化し、後者を「墮落した娼婦的女性」として貶めるような意識が透けて見えていただたく

思う。女性が性的欲望を持つとそれだけで貶められてしまうという問題は、今後も考え続ける必要があるだろう。

誤解を払拭するために、「レディコミ」誌と「ハードなBL」誌の読者層を読者アンケートから分析したいと考えていたところ、これらを出版している編集部のご厚意で、運よく読者アンケートを分析させていただく機会を得ることができた。

分析の結果、「レディコミ」誌も「ハードなBL」誌も、さまざまな職種・学歴・地域・ライフスタイルの人々に読まれていることがわかった。会社員や主婦が多くを占めるが、大学生もいるし、当然ながらセックス経験のない人もいて、必ずしも性的にアクティブな人が読者というわけではなかった。

また、読者の性別を調べたところ、「レディコミ」の男性読者はごくわずかで、「ハードなBL」に関しては雑誌にアンケートを送った人のうち1割程度が男性であった。BLに関しては男性の数が少なくないが、そのアンケートには「地方在住でゲイ雑誌が手軽に買えないので、この雑誌はありがたい存在です」といったように、ゲイであると名乗る人もみられた。どちらもメインターゲットは女性であることをまずは強調しておきたい。

■女性読者が雑誌に寄せる要望

女性読者たちは読者アンケートを送ることによって、雑誌にどのような要望を寄せているのだろうか。ポルノコミック誌の編集部には、マンガ作品や雑誌記事に関するさまざまな要望が寄せられていた。読者の要望から二つのことが見えてくる。一つは、ポルノコミック誌は女性たちにとって、性の情報源として機能しているという点である。例えば、「レディコミ」には、性商品（「女性にもおすすめのアダルトビデオ」「パイプなどのショップ情報」など）に関する情報を提供してほしいという意見が多くみられた。また、他の読者の性体験によって構成された「レディコミ」の記事はとても人気を集めていた。性について語る場がない女性たちや、性についての情報が得にくい女性たちにとって、女性向けポルノは重要な情報交換の

場になっているようだ。

もう一つは、女性たちが性表現を熱く求めているという事実である。もちろん、「表紙を本屋さんで買いやすいもの」にしてくれという要望も見られたが、自分の好みのシチュエーションを書き連ねてきた読者アンケートがもっとも多くみられるものであった。

女性向けのマスターベーション・ファンタジーを前面に売り出した初の商業誌である「レディコミ」、『コミック Amour』の創刊にかかわった水野正文氏によると、それ以前には男性向けポルノの編集に携わっていたので、創刊当初はソフトな表現にすることに気を配っていたようだ。しかし、始めてみると、読者の反応は「もっとHに」というもので、とても驚いたという。

「レディコミ」や「ハードなBL」が商品になったのは、まさにそうした表現を待ち望んでいた読者が存在していたからである。女性たちが性的な表現に接することを阻止しようとする性のダブルスタンダードにもかかわらず、女性たち自身は性に関する情報や性的な表現を求めてもいるのである。

■マンガ作品に対する女性読者の反応

「レディコミ」のマンガ作品に寄せられた読者アンケートから、女性たちを取り囲むもうひとつの性をめぐる問題がみえてくる。

読者アンケートには、「どのマンガ作品がよかったか／つまらなかったか」を記載する欄がある。「好きな作品」やその理由は多様であったが、「つまらない作品」については共通性がみられた。ただし、女性読者たちは「つまらない」という理由で作品を否定するわけではない。この欄に書かれた最も多くの理由は、「こわい」というものであった。読者アンケート用紙に提示されているわけでもない「こわい」という言葉が、多くの読者にとって作品を批判する基準となっていることは興味深い。読者に批判されやすい作品は、恐怖感をもたれやすい行為が描かれている作品や、読後感がすっきりしない作品などであった。恐怖感が勝るなら、快楽が阻害されてしまうことが読者たちに

問題視されていたのである。

ここで明らかになるのが、女性たちにとって、性は快楽であるが、恐怖と裏表のものとしても存在している可能性があるという点だ。ただし、読者によって、どの作品が「こわい」ものであるかの判断は分かれるものでもあることを付け加えておきたい。いずれにせよ、読者は雑誌の送り手に向けて、より「Hな」内容を求めているものの、過激さが個人にとって「こわい」方向に向かうことに対しては積極的に批判＝抵抗をしている点は興味深い。

4. 「女性向け」と「男性向け」の比較分析

読者アンケートから読み解いてきた特徴は、マンガ作品を分析してみても同様にみえてくるものなのだろうか。「レディコミ」誌や「ハードなBL」誌に掲載されたマンガ作品の特徴を明らかにするために、男性向けポルノコミックと比較分析してみたい。

ここで、男性向けポルノコミックのジャンルを簡単に説明しておこう。男性向けポルノコミックには、1970年代に創刊され、現在に至る最も古いジャンルの「エロ劇画」誌と、同人誌・アニメ文化の流れをくみ、80年代以降に主流になった「美少女コミック」誌がある。本節では、「レディコミ」「ハードなBL」という女性向けポルノコミック誌と、「エロ劇画」「美少女コミック」という男性向けポルノコミック誌について、各ジャンル3雑誌をとりあげ、そこに掲載されたすべての作品を扱うことによって、比較分析していく。

■性描写の比重

「女性向けのポルノは性行為にいたる言い訳が長い」、「女性が好む性的な物語にとってセックスはおまけだ」とする議論に出くわすこともしばしばである。ところが、女性向けポルノコミックをみる限り、マンガ作品が性的なシーンよりもお話部

表1 マンガ作品のページ数と性描写

	①一話当たり ページ	②性描写 ページ	③導入 ページ
エロ劇画	21.38	10.95 (51.22%)	5.24 (24.51%)
美少女 コミック	17.34	9.43 (54.38%)	3.54 (20.41%)
レディコミ	27.45	15.78 (57.49%)	2.96 (10.78%)
ハードな BL	30.00	10.17 (33.90%)	9.50 (31.67%)

分に力を割いているとは断言できなさそうである。

各ジャンルの雑誌に掲載されたマンガ作品それぞれについて、①一話当りページ数と、②作品中でセックスシーンが描かれているページ数（性描写ページ）、③セックスシーンが始まるまでのページ数（導入ページ）を数え、それぞれのジャンルの平均を算出した（表1）。

①その結果、一話当りのページ数は、「レディコミ」と「ハードなBL」は30ページ弱で、「エロ劇画」と「美少女コミック」は20ページ前後であった。確かに物語全体のページ数をみると、女性向けは男性向けよりも長いという傾向がみられる。

②しかし、「レディコミ」や「ハードなBL」は、性描写に比重をかけていないわけではない。セックスシーンを描いたページ数をみると、「レディコミ」が圧倒的に多く、「ハードなBL」についても男性向けとあまりかわらないページ数である。セックスシーンを描写したページ数が作品全体に占める割合をそれぞれ計算してみても、「レディコミ」は他の男性向け2ジャンルと比べて割合は若干高くさえあった。

③また、「レディコミ」については、性行為にいたるまでの物語部分が長いというわけでもない。最初のセックスシーンの描写に至るまでのページ数をカウントした結果、「ハードなBL」はやや長めであったが、「レディコミ」は、他の男性向け2ジャンルと比べてページ数も、そのページ数が作品全体に占める割合も圧倒的に少なかった。

ただし、「ハードなBL」については、補足説明が必要だ。マンガ作品における性描写の割合に

ついて、他の3ジャンルに関しては、とりあげた3雑誌間の違いがほとんどみられないのだが、「ハードなBL」については、とりあげた3雑誌の間に顕著な違いが見受けられた。②セックスシーンを描いたページ数も、③セックスシーンが始まるまでのページ数も、「レディコミ」や男性向けジャンルとほぼ同じ雑誌もあったが、「セックスはおまけ」程度の雑誌も含まれていた。「ハードなBL」3雑誌を平均した割合の低さは、雑誌間の格差が非常に大きいことによるものといえる。

このようにみると、女性向けポルノコミックは、性描写の割合が低かったり、性描写にいたる「前おき」が長かったりするわけではなく、物語全体が長いということができよう。「女性向けのポルノは性行為にいたる前置きが長い」、「女性が好む物語にとってセックスはおまけだ」といった仮定は誤りであることがわかるだろう。

この数値にもみられるように、女性向けポルノコミックは、男性向けと比べて性行為描写そのものに関しては、違いがないということもできよう。表現された性行為に関しても、その「過激さ」に違いはみられないのである。

■「内面のモノログ」の書き込み

マンガ作品には女性向けと男性向けの違いはみられないのだろうか？ 女性向けポルノコミックにみられる一つの特徴として、「内面のモノログ」技法が多用される点を指摘することができる。

この技法は、登場人物の音声化されない心情を、通常の「ふきだし」ではない部分に言葉で書き入れる手法をさす。心の中で思っていることまでもが科白の一つとして説明されているわけである。

4ジャンルのポルノコミックの各作品において、「内面のモノログ」の使われ方を分析してみよう。まず、セックスシーンの最中にこの「内面のモノログ」技法が一つでも使われているかどうかを調べてみた。男性向けに関しては、「エロ劇画」では43%、「美少女コミック」では50%の作品にしか性行為中のモノログはみられなかった。また、その内容もほとんど喘ぎ声を中心であった。これに対し、女性向けに関しては、「レディコミ」

では81%、「ハードなBL」では80%の作品に性行為中のモノログがみられた。また、内容についても、登場人物がその性行為をどうとらえているのか、相手が性行為をしてくることをどう思っているのか、より細やかに描いている。女性向けポルノコミックは、性行為という「しゃべらない」状態のときでさえ、登場人物が何を考えているのかを読者にストレートに開示することをより重視していることがわかる。

「内面のモノログ」技法が使用されているのは性行為中ばかりとは限らない。セックスシーン以外に書かれるモノログは、物語を登場人物の視点から進行させる働きをもつ。物語を進行させるモノログが一つでも存在しているかどうか調べたところ、「エロ劇画」では76%、「美少女コミック」では69%であるのに対し、「レディコミ」では91%、「ハードなBL」に至っては100%に達した。女性向けポルノコミックのモノログに書かれた内容もまた特徴的である。男性向けポルノコミックの「内面のモノログ」では、単に物語の場面設定を説明するだけであるのだが、そのみならず、セックスシーンに至るまでのモノログでは性行為に至る動機が語られているし、セックスシーン以降のモノログでは性行為の結果への解釈が提示されている。とりわけ重要な「行為の解釈」が書かれる物語の終結部分において、モノログが使われているかどうかを調べてみると、「エロ劇画」では57%、「美少女コミック」では31%であるのに対し、「レディコミ」では81%、「ハードなBL」では87%と、かなり異なる傾向がみてとれる。

ちなみに「レディコミ」や「ハードなBL」の作品において、「内面のモノログ」技法によって示されるのは、性行為において受動的な側（受け）の心情である場合が多い。モノログによって、行為においては受動的な「受け」が、嫌がっているわけではなく、その行為を主体的に望んでいることが読者に明示されているわけだ。

性行為を描写することには危険が伴う。それがとりわけある種の「過激さ」を伴っている性行為であればあるほど、描かれている行為がリアルなレイプなのではないか、「受け」の主体性が完全に

奪われてしまっているのではないかといった恐怖を読者は感じかねない。このリスクを減らし安全化するために、登場人物の心情や意味付けを提示し、行為が暴力ではないことを示す必要があるのだ。つまり、行為における受動性を、動機や結果の解釈という心情の能動性によって乗り越えようとするのが女性向けポルノコミックの大きな特徴といえるだろう。つまり、女性向けポルノコミックというのは、登場人物の心情を明らかにすることによって、読者にとって安全にポルノを楽しむような配慮がなされているわけなのだ。

その他にも、女性向けポルノコミックにはいくつかの特徴を見つけることができるが、ここでは紙幅の関係で紹介は割愛する。

このように女性向けポルノコミックの特徴をとりだしてみると、性に関する表現を求める読者の存在や、表現される性行為の「過激さ」には、男性向けと比べても違いはない。だが、女性向けポルノコミックにおいては、表現を安全なものにしようと、さまざまな試みがなされているように思う。女性にとって、安全に性表現が楽しめる場が保障されることが、強く求められている。

ポルノグラフィは、「悪いもの」という前提でのみ考察されることの多い主題である。しかし、その一方で、多くの人がマスターベーションのためにポルノを使用しているのも確かな事実である。そうであるならば、「ポルノ＝悪」と決めつけて、みないふりをするのではなく、ポルノはどんな問題を引き起こしやすいのか、もっと安全に楽しめる性表現とは何なのか、議論を積み上げる必要があるのではないだろうか。また、フェミニズムの文脈においても、「ポルノグラフィは本質的に男性が楽しむもので、女性の敵である」という前提によってポルノグラフィを批判することは、女性の性的欲望を見過ごすことになりかねない。

女性の性的欲望を看過しない、新たなフェミニスト・ポルノグラフィ論の展開を目指しての私の研究は、『フェミニズムとポルノグラフィ（仮）』（青弓社ライブラリーより近刊予定）を参照されたい。